

二国間交流事業 セミナー報告書

令和5年7月31日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

北海道大学・文学研究院

[職・氏名]

教授・竹澤正哲

[課題番号]

JPJSBP 220233601

1. 事業名 相手国: ドイツ (振興会対応機関: DFG) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) 子から親への文化伝達:健康心理学と文化進化論の接合による新たな文化伝達の探求

(英文) Can children transmit healthy and sustainable eating preferences to their parents? Joining health psychology and cultural evolutionary theory to explore new avenues in cultural transmission

3. 開催期間 2023年6月12日 ~ 2023年6月15日 (4日間)【延長前】 年 月 日 ~ 年 月 日 (日間)

4. 開催地(都市名)

マンハイム

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Mannheim, Professor, Jutta Mata6. 委託費総額(返還額を除く) 1,778,778 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	4 名	4 名
相手国側参加者等	4 名	0 名

参加者リスト(様式 B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスカーション)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。委託費総額の50%に相当する額を超える費目間流用については、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

本セミナーには2つの目的があった。第1に、ドイツ側代表者である Mata 教授の研究チームが収集した、家庭内における菜食主義選好の拡散に関する実験／調査データを多角的に検討し、子から親への逆垂直伝達の強度や生起条件を検討するために必要な研究デザインについて議論することである。第2に、菜食主義選好の拡散が文化進化学にもたらすインパクトを検討することである。セミナーでは、日本側参加者である田村とドイツ側参加者である Deffner が、文化進化学の基礎的概念についてトークをした。またドイツ側代表者である Mata による健康心理学の基礎的知見についてのトーク、日本側代表者による竹澤による文化進化学と集団意思決定研究における理論モデルについてのトークが行われた。残る参加者によってドイツ側で収集されたデータについての報告および各自の研究報告が行われた。最後に、ドイツ側が収集したデータを分析するための統計モデル、新たに予定されている調査実験のデザイン、食選好の文化進化を検討するために必要なデータ等についてディスカッションを行った。

- (2) 学術的価値(セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

ドイツにおける菜食主義の急速な拡散は、文化進化学から見るとユニークな現象である。特に興味深いのは、ドイツにおける菜食主義は、まず若者世代の中で急激に拡散し、その後を追うように、家庭内で子供から親へと伝播していることにある。文化進化学では、同世代内での伝播は水平伝達としてモデル化されている。また親から子への伝播は垂直伝達として定式化されているが、「子供から親へ」という垂直逆行伝播は、その存在が検討されたことはなく、さらにこれが文化のダイナミクスにどのような影響をもたらすのか、体系的に検討されたことはない。本セミナーでは、どのような手法を用いれば、Mata 教授らが収集したデータを文化進化学の観点から検討できるかについて議論し、今後の共同研究へとつながる成果を得た。

- (3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

ドイツ側代表者である Mata 教授が専門とする健康心理学では、文化進化学の視点や、文化進化学で用いられている数理モデル、統計モデルがほとんど知られていない。日本側参加者である田村は、文化進化学の教科書を執筆するなど諸分野に対して文化進化学を広めることに貢献している。また代表者である竹澤は、心理学において文化進化学の発想を導入するための活動を続けている。本セミナーの開催を通して、双方の領域における情報が共有され、健康心理学における文化進化学の概念や理論モデルの応用可能性について議論が進展した。

- (4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

ドイツ側代表者である Mata 教授は、サステイナブルな食習慣としての菜食主義の拡大に強い関心を持っている。本セミナーおよび今後予定されている共同研究によって、ドイツにおける菜食主義の伝播過程および伝播を促進する要因が明らかになれば、サステイナブルで健康的な社会の構築へ向けて、一定の貢献が期待される。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本セミナーにおいては、参加したドイツ側および日本側の大学院生が発表を行い、それぞれの研究について今後の進展のための議論が行われた。本セミナーの開催なくしては出会うことのなかったであろう他の参加者との交流を通して、各自の研究を深化・発展させるための貴重な機会が提供された。

(6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

ドイツ側代表者である Mata 教授は、DFG からのグラントによって本年度中に北海道大学を訪問し、日本側代表者である竹澤とともに、本セミナーでの議論に基づいて、新たな共同研究の立案を計画している。特に本セミナーの内容を発展させた上で、二国間交流事業(共同研究)の申請を予定している。

(7) その他(上記(2)～(6) 以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記載してください)